

「落語と私」 その拾七

三代目 橘ノ百圓

では、今回男の三道楽の「買う」の話をしてします。「買う」と言いましても、通販で健康器具を買う噺では在りませんヨ。「お女郎買い」です。そう書くと、女性の読者の方は、眉をひそめる方も居るかも知れませんが、家康が江戸に幕府を定めてから、江戸への人口流入は急激に増えまして、特に築城並びに町造りに携わる労働者、言わば男の数が絶対的に多かった訳です。そこで、この男達のエネルギーの吐け口として、庄司甚右衛門が家康に請願して認められ、元和3年にご城下の人形町の外、葎の生えている原を遊廓地として賜わり「葎原」としたが、葎は悪に通じる処から「吉原」と改名、その40年ほど後の明暦の大火で、お城近くにこの様な人が多勢集まる所を置くのは危ないとの事で、多くの木材業と共に移転の運びと成りました。木材業は深川に、吉原は、浅草観音裏に移り、これが「新吉原」と呼ばれ、昭和33年3月の売春防止法施行まで、江戸文化の発祥地として、一大歓楽街が出来た訳です。落語に出て来る吉原は、全てこの新吉原を舞台としております。吉原の他に、四宿にも「飯盛り女」としてのお女郎がおりまして、これも噺に登場しますが、先ずは、大元の吉原から始めたいと思います。「錦の袈裟」。他の噺ではモテた事の無い与太郎が主人公で、町内の若い者が集って「隣の奴等に負けてたまるか」と、質流れの錦の布端を禪にして、素裸の総踊りをしようじゃねえかと衆議一決、ところが、この布が十枚しかなくて、与太郎の分が無い、「与太郎、お前も錦の布を都合つけりゃあ、一緒に連れてって遣るから」と言われ、家に帰ってカミさんに話すと、負けず嫌いの女房は知恵を搾って「お寺行って借りといで」「へえ、お寺のお尚さんは錦の禪をしてるのか?」「そうじゃ無いヨ、錦の袈裟を借りて来るの」とその口上を援けて家を出すと、与太郎は危いながらも、お寺で一番綺麗な袈裟を借り出すのに成功するのだが、ご住職に「その袈裟は、檀家の供え物でナ、明日の昼からその家の法事が在るので、それまでには必ず返す様に」と念を押され、ピカピカ輝く袈裟を大喜びで持ち帰り、カミさんに上手事禪に締めてもらうと、丁度禪の前側に象牙で出来た袈裟輪がブラブラ、その横には房まで着くと言うオマケまで。与太郎もバカに気に入って皆んなと吉原で大騒ぎ、お引け(夜中の12時)テェ事に成り、芸者に相撲甚句を弾かせ、全員素裸に成って錦の禪の揃いで総踊り、これには流石の花魁達も吃驚のバカ受!そこで、花魁の口に「これは華族様(お殿様)の隠れ遊び、中で一番偉いのが、禪の前に輪をブラブラさせてる方ですヨ」「エエそうですか!?皆さんお職人の言葉遣いだし、あの方が一番ボーッとしてますヨ」「そこが隠れ遊びなの、元々お偉い方はボーッとしているの、その証に前に輪を下げているでしょ、あれは、ご用の時に不浄なものに直接お触れにならない様に、あの輪にお掛になってご用をたすの、終わった後に傍きに有る房で雫をお祓いになるの、ですから外の方は皆さん家来ですから、あのお殿様だけ大切に扱う様に」テな訳で、その晩は与太郎は大モテ、外の者達は花魁に「この輪なし野郎」と言われ、全員が振られる有様。あの輪は女にモテる呪いか!?仕様が無えナ。「サア帰るから与太郎起して来い」「与太郎帰るぞ起きろ」と与太郎の相方の花魁が「下がれ家来共、頭が高い、殿の御前である」「何を言ってやんでえ、帰るぞ!」「いいえ、殿は今朝は帰しません」と与太郎さん「エッ!袈裟返さねえ、お寺シクジル」これは仕込

の地口落ですネ。斯様に落語に登場する遊女達は、親兄弟の為に身を売り、苦界に身を沈め悲惨な毎日を送っている訳です。だからこそ金に執着し、自己中心に生きて行こうとするのです。男を手玉に取り騙す遊女も悪いが、騙される男も悪い！と笑いとばす、決して親兄弟の為に身を売る事を美談としない処が落語ですネ。次に何ン人かの男が手玉に取られる噺「文違い」マア男の鼻の下の長さと、己惚の噺です。これは新宿の女郎、お杉が織りなす、因果応報の噺。前文にも書いた通り、江戸は絶対的に男の多い開発途上都市。一人の遊女に何ン人もの客が着く状態の中“己惚れは遊女の為の後楯、他人は客、我が身は真夫と想う客”お杉はどう客を騙すかですが、最初に登場するのが、日向屋の半七、お杉から手紙を貰い急いで来てみると、お杉の養父が又二十両の無心。この二十両を渡せば親子の縁を切っても良いからと言われ、「あんな親父がいたら、半ちゃんと一緒になったって、上手く行く訳きゃ無いからさ、どうしても二十両作っておくれヨ」「イヤ、俺もそいつが分っているから、方々駆けずり廻ったんだが、どうしても十両しか出来無えんだヨ。駄目かな十両じゃ!？」とそこへ、もう一人手紙を出していた、田舎者ンの客がお杉を訪ねて来る。「半ちゃん、チョイと待ってておくれヨ。私しゃ、角蔵から金えフンダクッて来るから」と筋向いの角蔵の部屋へ、お杉は部屋の障子を開けるなり「チョイと、生きてたのかい!？」と一ツカマしてから金の催促「おっ母さんが重い病で、どうしても人参と言う高い薬を飲ませなきゃならないの。その値が二十両なの。お前お金持ってんだろ」と角蔵は鼻の下を伸ばして、懷には村の者から馬を買う為に預った十五両は有るが、これを渡す訳にはいかないと断る。そこは百戦錬磨のお杉「じゃあ、お前は馬ア買って帰れば、おッ母さんが死んでも良いんだネ。要らないヨそんな金、その代り、年が明けたらお前と夫婦になるとの約束は反故にしておくれ」と開き直る。サアお杉の術中に嵌った角蔵は、頭を下げてお杉に十五両を差し出して「俺が悪かった。サアこの金受け取ってくれろ」と頼み込む、するとお杉が「何も、お前さんに謝らせたり、お金を貰ったり、そんな働きの在る女じゃ無いけどサア…」この言葉が、噺の一つの重要な鍵になります。真んまと十五両せしめたお杉は、元の半七の部屋へ「半ちゃん、何ンで部屋ア覗くんだヨ」(中略) 続けてお杉は「ネエ半ちゃん、十五両じゃ半端だから、後五両足しておくれヨ」「十五両有りア御の字だヨ」「向こうが二十両でえんだから二十両渡して遣りたいんだヨ、どうしても駄目なの!? 分りました、要りません」と又開き直って、半七も「俺が悪かった、五両持って来なヨ、俺が悪いと言ってるじゃねエか」と半七も頭ア下げる「何も、お前に謝らせたり、お金を貰ったり、そんな働きの在る女じゃ無いけどサア…」とこの台詞。半七は前の部屋で一遍聞いている筈ですがネ。ここでも金をフンダクったお杉は、「じゃア、この金親父に渡して来るから」と半七を待たせて、裏の梯子段下の薄っ暗い部屋へ、そこには、歳の頃三十二、三の色の浅黒い、鼻筋の通った、苦味走った良い男、目が悪いのか、盛んに紅絹の布で目頭を押えている。「吉っさん遅くなって済みません。やっとなお二十両のお金が出来たの、この金でその目を治しておくれヨ」「お杉無理な頼みを言って悪かったナア、これで俺の目も治らァ、



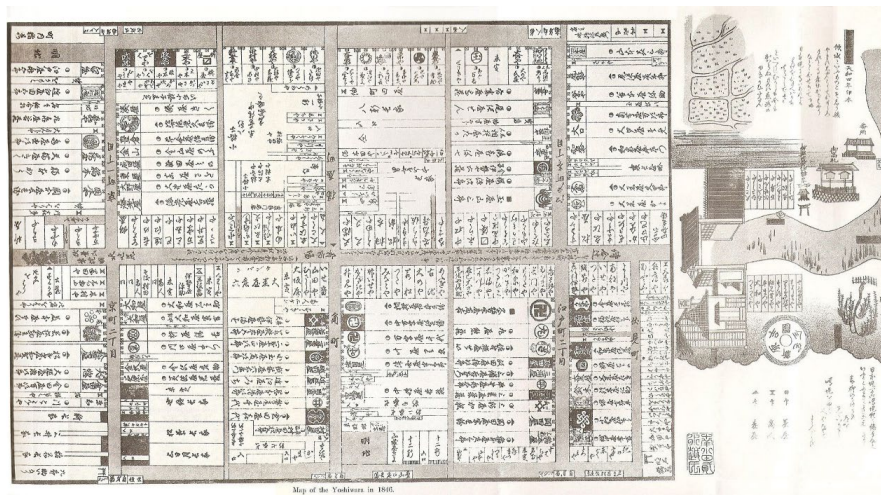
「四ツ谷内藤新宿」(名所江戸百景・広重)

『甲州街道 (日本橋→新宿追分)』

出典：<http://sakamitisanpo.gdg.jp/humitigai.html>

じゃア帰えるから」「待っておくれヨ、吉^よっさん今晚泊^とってっておくれヨ」「イヤ早く医者に行^いって目を治^してェんだ」「泊^とっててくれないんじゃ、このお金上げないヨ…」「ヘイ分^わりやした。この金はそちらにお返^{かへ}し申^{まう}します。」「怒^{いか}ったの!」「怒^{いか}ったも無^なエもんじゃねエか(中略)泊^とって行^いかなきゃ錢^{ぜに}はくれねエ、そんな想^{おも}いの掛^かった錢^{ぜに}で俺^{おれ}ア目^めでも潰^{つぶ}れた目^めにヤ^やアお^おっけねエや。俺^{おれ}アもう帰^{かえ}る」お杉^{としじろう}も吉次郎^{よしじろう}の術^{じゆつ}中に嵌^{かか}って「済^すいません、勘^{かん}弁^{べん}して、私^{わたし}が悪^{わる}かったんだから、このお金持^もってってヨ」「要^いら無^なエヤッ」「そん^{そん}な事^{こと}言^いわないで、私^{わたし}が悪^{わる}いって謝^{あやま}ってんじやないの」「何^{なん}も、お前^{めえ}に謝^{あやま}らしたり、錢^{ぜに}イ貰^{もら}ったり、そん^{そん}な働^{はたら}きの在^ある男^{おとこ}じゃ無^なえけども…」お杉^{としじろう}は二度^{ふた}も自分^{自分}が遣^{つか}った言葉^{ことば}で男^{おとこ}に騙^{だま}される訳^{わけ}です。この吉次郎^{よしじろう}も自分^{自分}が惚^ほれた女^{おんな}の為^{ため}に金^{かね}を工^く面^{めん}すると言^いう因果^{いんぐわ}応^{おう}報^{ほう}、お杉^{としじろう}は吉次郎^{よしじろう}が忘^{わす}れて行^いった手紙^{てがみ}で、半七^{はんしち}は、お杉^{としじろう}の部屋^{へや}の長火鉢^{ながひばち}の引^ひき出^だしから出^でて来^きた手紙^{てがみ}で、それぞれが騙^{だま}された事^{こと}に気^き付^つき大喧嘩^{だいけんか}、これ^{これ}を聞^きいた角藏^{かくざう}が、店^{みせ}の若^{わか}い者^{もの}ンに仲裁^{ちゆうさい}を頼^{たの}むが「あ^あの金^{かね}は色恋^{しきれん}では無^なエ、母様^{かかさま}塩梅^{しんばい}悪^{わる}イちゅで十五兩^{じゅうごらう}恵^{めぐ}んでやりやしたからってナ、アア待^{まち}てや喜助^{きすけ}、そう^{そう}だ^だな事^{こと}言^いうとケ^けッて俺^{おれ}が色男^{しきおとこ}ちゅうの^のが現^{あら}れやしねエか!」ハイ間拔^{まは}け落^おちです。これ^{これ}はそ^そのまま現^{げん}代^{だい}に通^{とほ}じます。彼女^{かのじょ}に高^{たか}いヴィトン^{uiton}のバ^バック^{バック}を強^ね請^だられ鼻^{はな}の下^{した}を伸^のばすと、彼女^{かのじょ}は何^{なん}ン人^{ひと}もの男^{おとこ}に同^{どう}じバ^バッグ^{バック}を買^かってもら^{もら}って^てるテ^てな話^{はなし}も聞^ききますヨ。皆^{みな}さんお気^きを付^つけく^ください。こ^この中^{なか}で角藏^{かくざう}先^{せん}生^{せい}が一^{いっ}番^{ばん}幸^{さい}せかも!?

次号は「落語と歌舞伎」と題して歌舞伎との関係を書きたいと思います。お楽しみに。



江戸末期の新吉原の見取り図
出典：<https://ja.wikipedia.org/wiki/>